勃興期における蒙古人の信仰対象信仰内容太陽崇拝等について

高　原　武　雄

On the Faith of the Mongols in Their Rising Time; the Object and Contents of Their Worship and the Existence of Heliolatry

Takeo TAKAHARA

The rise of the Mongols in the thirteenth century was an epochal event but it is extremely difficult to clarify the causes of their rise and to appraise accurately the serious influences on the later times.

It is, however, believable that their faith played an important role among many other causes that brought about the rise of the Mongols. Now, this problem will be discussed mainly in reference to "Mongol-un niguca tobcaan", one of the most valuable materials for the study of the early Uyen Dynasties histoy and the object and the contents of their worship, with the existence of heliolatry, will be stated.

序

13Cにおいて，蒙古民族の創建した欧亜に跨がる大帝国は，その版図の広大人類史上空前のものであり，その存続期間は支那では70年ロシヤでは200年の長きにわたったのである．従って彼等の活動が人類史上に及ぼした影響は，甚大なものがあったのである．

この大業は，周知の如く斡難河畔の僅少な部衆と非凡な首領の手によって創められ，その子孫によって拡充せられたのであるが，英主チンギスの功業は H. H. Howorth によれば，史上最高であって，Napoleon, Alexander, Timur を遥かに凌駕するとし（History of the Mongols P. 49）G. Vernadsky によれば，蒙古の勃興は人類史上決定的重大事件の一つであり，世界の運命を改変し，5Cのローマ帝国の傾覆にともなって起った民族大遷徒，7Cにおける回教徒の大勝利に伯仲するとしている．（蒙古与俄羅斯第1章 p. 1）しかし一般には神罰の一つと数えられ，恰も飛蝗の大群やカナダの森の火事のように，当時の人々を恐怖のどん底に突き落し，西アジヤ諸国家の文化と伝統を根絶した悪魔の所業とも批評されている．が Howorth もいう通り，これほどチンギスを冒瀆するものはなく，彼等の活動に対する誤れる評価もないのである．このような世界史上の大事件が，どのようにして起こされたかについての原因を明らかにすることもまた極めて困難なことである．G. Vernadsky はその社会学的原因として Scythians, Sarmatians, Huns, 第7Cにおけるアラブ人と軌を一つにする遊牧民族西進運動の巨潮であって，その主要原因は，物資の欠乏，戦利品の誘惑，近隣国家の無準備，国内的不統一等をあげ，心理学的理由は一個の謎であるとし，13Cの史家 Gregory Abul-Faraj, Gibbon の学説を引用して，チンギス汗の宗教観と世界国家の理想とが溶合して，この大事が為されたのではなかろうかと述べている．（蒙古与俄羅斯 p. 3～5）

しかし蒙古勃興（1206年チンギス第2次即位までの蒙古諸種族の統一）の原因とその世界国家への拡張の原因とを混同してはならない．蒙古勃興の主要原因は，(1)氏族的復讐の精神と復讐を恐れての殲滅戦，(2)避けることのできない生存への闘争，(3)単純ではあるが深く厚い信仰心．

蒙古拡張の主要原因としては，(1)「日の出ずるところより日の没るところまで敵の民あり」（A巻11, p. 516）とする四海皆敵の世界観，(2)より豊かなる生活を求めんとする野望，(3)軍事力の強盛，(4)寛容なる宗教政策，等を先ずあげなければならないと思うが，ここでは蒙古勃興の原因の一つである12C後半より13C前半における蒙古人の宗教のうち「信仰対象」「信仰内容」「太陽崇拝」等について記述する．

史料としては，主として那珂博士訳註元朝秘史すなわち「成吉思汗実録」（略記号A），小林高四郎氏現代語訳元朝秘史すなわち「蒙古の秘史」（略記号B），白鳥庫吉博士の蒙文音訳元朝秘史すなわち「蒙文音訳元朝秘史」（略記号C），岩村忍博士著 現代語訳 元朝秘史 すなわち「元朝秘史」（略記号D）によることとし，明訳及び蒙古語音訳はCによることとする．

Ⅰ 「元朝秘史」について

さて研究の結果を述べるにあたって，「元朝秘史」の資料としての価値について一言しなければならない．元初の史料が「元朝秘史」「皇元聖武親征録」「元史」Rashid-ud-Din の「集史」Juvaini の「世界征服者の歴史」C, D'ohsson の「モンゴル史」に主として限られることについては異論はない．

これ等のうち「元朝秘史」は最も重要な文献であり，（ウラヂミルッオフ蒙古社会制度史 p.15）モンゴル史の資料として無比な価値をもっている．（D, p.3）本書はチンギスハン家の聖なる伝説その「歴史」を記するために書かれたものであり，（ウラヂミルッオフ 蒙古社会制度史 p.15）成吉思汗の実録である．（A序論 p.60）又「秘史」は14C—16Cの蒙古語を知る上に欠くことのできぬ貴重な資料であり，遊牧民の叙事文学として他に比類のない価値をもっている．（Dまえがき p.3 p.5）古代蒙古語学，史学上の大宝庫である．（B, p.12）更に本書の資料としての重要性は，12C—13C蒙古人の生活の各方面を推察すべき極めて多量の材料を供給している点であり，いかなる遊牧民といえども，生き生きと細かに真の生活を画き出した点において「元朝秘史」ほどの文献はないのである．（ウラヂミルッオフ 蒙古社会制度史 p.15, 16）

本書12巻のうち正集10巻は，チンギス在世時代にウィグル人またはモンゴル人がウィグル文字をもって，当時の口碑にもとづいて書きはじめ，1240年に書き終ったものであり，その上限はウィグル滅亡の1204年である．続集にあたる2巻は，その後間もなく補修せられたものであろう．（岩村博士は1260年以後とし，小林氏は1286年としている．）いずれにしても本書は12, 13C蒙古の民俗を探る貴重な資料である．

Ⅱ 信仰対象

（1） 信仰対象の第1は騰格理(舌)—tengeri—である．

帖木真泰赤兀惕に襲はれ，帖児古捏の岡に逃れ入り出でんとしたとき，板脅した馬の鞍脱れ落ち，天啓を感じた帖木真のもらした語であるが「皇天止め給へるか」（A巻2, p.58）Bは「上天が 諌め止められたのだろうか」（B, p.35）と訳し，明訳は「騰格理(舌)(天) 亦(惕)(止)罕(中)(当) 阿忽(中)(莫)由(不) 客額由(説)(蕃)」（C巻2, p.15, a 16, b）としている．又第一次即位の時の成吉思の語であるが「皇天后土に力を添へて祐けられば」（A巻3, p.119）Bは「天地の神に祐護されるやうなことがあったら」（B巻3, p.81）明訳は「騰吉(天)里(舌)合(中)札(舌)刺(地)古(行)出(気)捏(力)篾(添)周……」（C巻3, p.49, a）更に闊亦田の戦に風雨の呪によって敗れ，札木合等が共々に語り合った語であるが「上帝に 愛まれざりき 我等」（A巻4, p.148）Bは「我々には上天の加護がなかったのだ」（B巻4, p.102）と訳し，明訳は「騰格理(舌)迭(天) 額蒔(行) 塔(不)阿(曽)刺(被)黒(愛) 荅(了)罷(唱) 必荅(共) 客額(説)(勅)都(了)額(了)惕」（C巻4, p.35, b）とある．同様に騰格理(舌)—tengeri—崇拝の事例は以上のほか A, p.101, 112, 122, 191, 198, 235, 297, 311, 340, 342, 344, 439, 516 の13をあげることができるが，Aでは「騰格理(舌)」を「皇天」又は「上帝」と訳し，Bでは「上天」「上帝」などと訳し，Dでは「天」又は「天の神」「神」と訳している．信仰の中心的対象であった．（騰吉里(舌)は騰格理(舌)と同じく—tengeri—の音訳である．）

（2） 信仰対象の第2は迭額列(舌)騰格理(舌)—degere tengeri—である．

巻頭の一齣であるが「上天より命ありて生れたる蒼き狼ありき」（A巻1, p.1）Bは「上天から命をうけて生れた蒼い狼があった」（B, p.1）とし，明訳は「迭額列(舌)(上)騰格理(舌)(天)一額扯(処) 札牙阿禿(命)(有)(的) 脱列(舌)(生)(了)克(的)先(蒼)孛(舌)(色)児(狼)帖(有) 赤那(来) 阿主(来)兀(来)」（C巻1, p.1, a）としている．

又篾児乞惕遠征に出発する速別額台に下した成吉思の語であるが「上なる天にも祐護せられんぞ，汝等」（A巻8, p.305）Bは「必ず天にも 加護されるというものだ！」（B, p.194）と訳し，明訳は「迭額列(舌)(上) 騰格理(舌)(天)一迭(行)別(舌)児(也) 亦協額(被)克(護)(助) 迭梅者塔(有)(也)(者)(慾) 客延(恥)(道)」（C巻8, p.10, b）としている．以上のほか迭額列(舌)(上) 騰格理(舌)(天)—degere tengeri—崇拝の事例はA巻6, p.225にもある．Aでは「上天」とか「上なる天」と訳し，Bは「上天」とか「天」とし Dでは「高い天」とか「上天の神」と訳している．明訳はすべて「上天」としている．

（3） 信仰対象の第3は蒙格騰格理(舌) — munke tengeri —である．

カラカルジトの戦の後孛斡児出の後れ至れる時の成吉思の語であるが「長生の上帝知り召せ」（A巻6, p.214）Bは「長生の 上帝 知ろし 召せ！」（B, p.146）明訳は「蒙格(長)(生) 騰格理(舌)(天) 篾迭禿該(知)(道)(者)」（C巻6, p.12, a）としている．又篾児乞惕誅滅についての鉄車の勅には「長生の上帝に力勢を添へられて」（A巻8, p.304）とあり，Bは「長生の 上天に 祐護せられ」（B, p. 194）とし明訳は「蒙格騰格理(舌)一迭(行) 古出(気)(力) 阿兀合(中)捏篾(気)(力)克(被)迭周(添)(蕃)」（A巻 8, p. 9, b）である．更に朶児伯多黒申の禿馬禿征伐に賜われる成吉思の勅には「長生の上帝に祷りて」（A巻10, p. 405）とあり，Bは「長生の上帝に祷り」（B, p. 243）とし，明訳は「蒙格(長)(生) 騰格理(舌)(天)一(行)冥(禱) 札(勅)把(告)里(舌)周(蕃)」（C巻10,

p. 18, b）である．Aは「長生の上帝」とし，Bは「長生の上天」又は「長生の上帝」「長生の蒼天」とし，Dは「永遠なる神」「永遠なる天の神」と訳し，明訳はすべて「長生天」である．これらのほか蒙格騰格理（舌）—munke tengeri—崇拝の事例は A, p. 259, 333, 344, 414, 412, 474, 563, 566, 576, 635 の 10 ヶ所に見えている．

（4） 騰格理（舌），迭額列（舌）騰格理（舌），蒙格騰格理（舌）の関係について

迭額列（舌）—degere—も蒙格—munke—も「上なる」とか「長生」の意味であって，共に信仰対象としての騰格理（舌）—tengeri— の尊称にすぎないと思われるので以上の三者は別々のものでなく，信仰対象としての同一の騰格理（舌）を指すものであろう．

（5） 騰格理（舌）という語の意味について

以上叙べたごとく騰格理（舌）という語は，神格者としての「天」をさすものであるが，A巻 11, p. 465 に闊々搠思が拙赤を訓める言葉の中に「星ある天は廻りてありき」Bには「星ある天が廻転して居り」とし，明訳は「豁都台（hodutai 星有的）騰格理（舌 天）豁児赤周（舌 転者）不列額（舌 有来）」C巻11, p.24, a）とあるところより見れば，青空の意味にも用いた．又A巻12, p.577には「成吉思合罕は上天に昇り給ひぬ」Bには「昇天し給うた」（B, p.291）明訳は「騰格理（舌 天）突児（舌 行）合児罷（中 上去行）」とあるところより見ると，合罕の霊の復帰するところをも意味した．

（6） 信仰対象の第4は皇天と併せて后土すなわち合札（中）児（舌）—γazar—である．

篾児乞惕に勝利を得たのち，王罕札木合二人の僚友に対する成吉思の謝辞には「皇天后土に力を添へられて稜威ある皇天に名乗りて，母なる大地に到らしめて」（A巻3, p.101, B, p.68）とし，明訳は「騰吉里（舌 天）合札剌（中 舌 地 行）古出（舌 気力）捏篾克（被 添）迭周（舌 着）額児客禿（舌 威勢有的）騰吉里（舌 天）迭（舌 行）捏列亦（惕）抽（舌 被題）額客（舌 母）額禿格捏（舌 地 行）古児格周（舌 到 着）」（C巻3, p.22, b）としている．又主児扯歹に賜わる恩諭には「皇天后土に力を添へられて」（A巻8, p.344）Bは「天地の神に加護されて」（B, p.209）とし，明訳は「騰格理（舌 天）合札剌（中 舌 地 行）古出（舌 気力）捏（舌 被）篾克（舌 添）迭周（舌 着）」（C巻8, p.44, b）とある．同様合札（中）児（舌）—γazar—信仰の事例は A, p.112, 119, 191, 344, 516, にも見えている．Aは「后土」と訳しBは「地の神」とし明訳はすべて「地」である．

（7） 合札（中）児（舌）—γazar—と額脱堅—otogen—について

次の事例が示すところによれば，大地は斡脱堅—otogen—と呼ばれ，地面は合札（中）児（舌）闊雪児（舌）—γazar kosur—と言われた．成吉思第一次即位の時の推戴の辞に「黒き頭を地の上に棄てゝ去れ」（A巻3, p.115）とありBは「黒き頭を刎ねて，大地に棄てゝ去れ」（B, p.78）明訳は「合剌（中 舌 黒 頭）帖里兀（舌 頭）馬訥（舌 俺的）合札（中 舌 地）児（舌）闊雪児（舌）途児（舌 行）格周（舌 撮着）斡惕（去）」（C巻3, p.44, a）としている．又成吉思征西にあたっての言葉には「母なる大地は広くあり」（A巻11, p.470）Bは「母なる大地は寛い」（B, p.271）明訳は「斡脱堅（地）額客（舌 母）阿為備（舌 寛 有）」（C巻11, p.30, a）とし，Dは p.51 に，合札（中）児（舌）闊雪児（舌）を「地上」と訳している．

（8） 山水その他の信仰対象について

「元朝秘史」の語るところによれば，以上列挙したる信仰対象のほか，帖木真が不嗎（舌）罕嶽に篾児乞惕の危難を救はれたとき感謝の祈を捧げたが，A巻3, p.83には「不児罕の御嶽を朝ごと祭れ，日ごとに祷れ」Bには「朝毎に祀ろう，日毎に祷ろう」（B, p.53）とし明訳は「不嗎（舌 山）罕（中 名）合勒（中 行）都泥馬納（中 舌 毎 早）合児（舌）馬里牙速孩（中 祭 祀）兀都児（舌 毎 日）不里（舌）斡赤速（舌 禱 告）該（舌 中）」（C巻2, p.50, a）とある．不児罕の山も亦信仰の対象であったのである．従って山嶽も信仰の対象であったのであろう．又A巻 12, p. 598-601 によれば，斡歌歹は西紀1230年に全国征伐を行ったが「彼は病に取附かれて口舌（の用）を失ふほど艱まされたるを師巫の占者に占はせたれば，乞塔惕の民の地水の主王だちは人民住具を掠められ，城ども郡ども壊られて厳しく崇れるなり」（B, C, D 共に同意訳）とあり，それで拖雷はこれを占える師巫の言の如く，詛える水を飲んで兄の身替りとなったことが記されている．元史睿宗伝にもこの事を載せているが，「地の神」と共に「水の神」もまた信仰の対象であったのである．さきにも叙べた不児罕嶽に命を救われた帖木真感謝の祷には「日を迎へて……日に〔向ひ〕九たび跪きて，潅奠祈祷を捧げたり」（A巻2, p.83）とありBには「太陽に向って九たび跪拝してから……祈祷を捧げた」（B, p. 53）と訳し明訳は「納闌（舌 日）額薛児（舌 迎 着）古……納闌（舌 日）也孫帖（舌 九 遍）莎葛（惕）抽（舌 跪）撒出里（舌 着）斡赤兀里（舌 麗 奠）斡克（与了）罷（舌 禱 祝）」（C巻2, p.51, a）とある．これは不嗎罕嶽にあやうい生命を救われた感謝の祭であって，太陽に向って九たび跪拝することがただちに太陽崇拝であると断定することは困難であって，恐らく不嗎罕の山を祭ると共に，最高神騰格理—tengeri—への感謝の祷りであったのであろう．又A巻 2, p. 47 には，俺巴孩合罕の二人の夫人が焼飯祭という祖先の祭をしたことが記してある「祖の霊を地に祭り」Bでは「先祖の霊を地に祭って」

(B, p.28) とし明訳では「也客薛(大的每行)　合札魯(中 地 裏)　亦揑魯(舌 舌 焼飯祭祀)」(C巻2, p.1, b) としている.(注元史七十七国浴旧礼中には「焼飯以為祭」とある.) 従って祖先の霊もまた信仰の対象であった.

以上記述したところが「元朝秘史」に見えている12C 13Cにおける蒙古人の信仰対象である.

(9) 太陽崇拝等について

「元朝秘史」では太陽崇邦の存在を決定づける資料はないが, C. D'ohsson, H. Howorth 共に1246年定宗(貴由)即位式の模様を, これに参列した P. Carpin の旅行記によって次のようにのべている.「将軍を従へて帳幕を出で, 三度膝を屈して太陽を拝したり」(田中博士訳補蒙古史下巻 p.133)

「Kuyuk with his followers then left the tent and did obeisance to the sun.」(History of the Mongols, H. Howorth, P.163) これは恐らくは, さきに不児罕の祭について述べたように, 太陽崇拝であると共に騰格理(舌)(皇天又は天の神)—tengeri—への感謝の礼拝であると思われるのである. 従って納闌(日すなわち太陽)—naran—と騰格理(舌)との間には深い関係があったのではなかろうかと思われる. これについても「元朝秘史」に見える阿闌媛の「光る人の子」の感生説話は, この間の消息を物語るものであろう. この物語の本源的なものは「元朝秘史」であって,「集史」(元史訳文証補による) ドーソン(第二章 p. 57 田中博士訳)「元史」(本紀巻第一) に大同小異の物語を載せている. 勿論「元朝秘史」の原本である「成吉思汗根原」に由来するものと思われるが, 阿闌媛は夜毎に帳幕の天窓より入り来る「光」の精を夢みて孕り, 成吉思の遠祖たる孛端察児を生むという説話である. A巻1, p.12 に「明かに彼の(光る人の子)は皇天の御子なるぞ」Bには「きっと彼の子は天の子に違ひないのですよ」(B, p.6) とし, 明訳では「忝迭克(明白)　亦訥(他的)　騰吉里(舌)一因(天的)　可兀(子)(惕)　備由(有也)一者」(C巻1, p.13, a) としている. この物語に現われる「光」,「白光」(元史)「煌々たる光」(ドーソン) は「太陽」をさすものではなかろうかと思うのである. (注このような伝承があったにもかかわらず, 成吉思には自らが天つ神の子孫であるという思想は「秘史」の中で見出し得ない.) リュブルックの旅行記によれば, 当時の蒙古人が東, 西, 南, 北, 太陽, 月, 火, 水を信仰の対象としていたことが記されている. (リュブルック東遊記 p.56) 又ドーソンの蒙古史にも日, 月, 山, 川, 諸元を崇拝していたことが述べられている. (ドーソン著, 田中博士訳補, 蒙古史上巻 p. 63) 要するに草にも木にも, 火にすら万象に霊の存在を信じていたのである. (小林高四郎氏著, ジンギスカン p.12)

(10) 最高の信仰対象(信仰の中心)について

以上のべた通り勃興時における蒙古人が, 騰格理(舌)(皇天)—tengeri—, 迭格列(舌)騰格理(舌)(上天)—degere tengeri—, 蒙格騰格理(舌)(長生の上帝)—munke tengeri—, 合札児(中 舌)(后土)—γazar—, 山, 水, 太陽—naran—, 月, 火, 草木に至るまで万象に霊の存在を信じて, 信仰の対象としていたのであるが, その最高の信仰対象すなわち信仰の中心は, 騰格理(舌)—tengeri— であった.

「元朝秘史」に見える信仰対象に関する史料—37—のうち, 騰格理(舌)信仰に関するものが—35—であり, このうち「騰格理(舌)—合札児(中 舌)」とあるものが8である. (注 合札児(中 舌)のみを信仰対象としているものはない.) 残る2史料は「不児罕山」と「地水の神」信仰にかかるものである. 従って騰格理(舌)—tengeri— こそは最高の神であり, 戦の勝利も敗北も, 罕の位にのぼることも, 幸福も不幸も, 人間の運命は悉く騰格理(舌)の支配するところと信ぜられていたのである.「一事として, これを天に帰せざるはなかったのである」(小林高四郎氏, ジンギスカン, p. 13) そしてこれに次ぐ信仰対象が「后土」すなわち合札児(中 舌)—γazar—であった.

Ⅲ 信仰内容について

以上で当時の蒙古人の信仰対象が何であり, その中心的信仰対象が何であったかについてのべたのであるが, その信仰の内容についても「秘史」は次の如く語っている.

(1) 信仰内容の第一は, 皇天(騰格理(舌)) 后土(合札児(中 舌))の命(神告)に対する尊信である.

成吉思第一次即位のとき豁児赤に降った神告であるが「皇天后土議り合ひて, 帖木真を国の主人と為れと云ひ……」(A巻3, p.112) Bは「天地の神諮り給うてテムヂンを国の主となし給へ……」(B, p.75) とし, 明訳は「騰吉里(舌)(天)　合札児(中 舌)(地)　額耶禿(商)勒(量)都(産)周　帖木只(人)泥(名)　兀(行)魯(国)孫(的)　額氈(主人)　孛勒(教)禿(做)孩(中)　客延(廖道)」(C巻3, p.38, b) としているが, これと同じく騰格理(舌)—tengeri— の命に関する事例は, A, p.1, 58, 297, 311, 340, 412, 439の7ケ所に見えている. 事例の数は少いが, 上天の命(神告)への尊信は, 成吉思の第一次第二次即位に深い関係があるのである.

(2) 信仰内容の第二は, 皇天(騰格理(舌)) 后土(合札児(中 舌))の愛護, 力添えへの信頼である.

第一次即位のときの成吉思の言葉であるが「皇天后土に力を添へて祐けられば」(Ⅱ, (1) に前掲, A巻 3,

p. 119）Bは「天地の神様に祐護されるやうなことがあったら」（B, p. 81）とし，明訳は「騰吉里（舌天）　合札剌（中舌地）　古（行）　気出（力）　捏篾周（添）　亦赫額克迭額速（被護助）呵」（C巻3, p. 49, a）である．又巴歹乞失里黒恩賞の辞には「長生の上帝に祐護せられて」（A巻7, p. 259）Bは「長生の上天に祐護せられて」（B, p.167）とし，「蒙格（長生）　騰格理迭（舌天行）　亦協額克迭（被護助）　周（添）」（C巻7, p. 3, b）と明訳している．同じ事例は，A, p. 101, 148, 152, 191, 198, 214, 225, 235, 304, 305. 333, 344, 474, 516, 563, 566, 576, 635 の18ヶ所に見えている．

以上のべた皇天（騰格理（舌））后土（合札児（中舌））の愛護祐助，力添え，照覧への信頼は，逆境と闘い困難に堪えしのぶ首領帖木真やその部下の心の支えとなり，戦勝の原因ともなったのである．

む　す　び

以上で「元朝秘史」を中心として，勃興当時の蒙古人の宗教のうち，その信仰対象，信仰内容について述べたのであるが，その信仰の中心は騰格理（舌）—tengeri— であった．信仰の内容は，騰格理（舌）の命（神告）への尊信と，それの祐護，力添え，照覧への信頼であって，これらが蒙古の勃興に少からぬ影響をあたえているのである．だが信仰の対象や信仰の内容もさることながらその焦点は何といっても，信仰の広さと深さとである．当時の蒙古人は，そのほとんどが同じ信仰に生き，その宗教的信念の深さに至っては，吾人の想像を絶するものがあったのである．このことについては稿を改めて述べることとする．

参　考　文　献

那珂通世著　：成吉思汗実録，1907

小林高四郎著：蒙古の秘史，1941

白鳥庫吉訳　：音訳蒙文元朝秘史，1943

岩村　忍著　：元朝秘史，1963

妹尾韶夫訳　：リュブルック東遊記，1944

H. Howorth：“History of the Mongols”（文殿閣続印）1938

C. D'ohsson：蒙古史（田中萃一郎訳補）1939

小林高四郎著：ジンギスカン，1960

G. Vernadsky：蒙古与俄羅斯（札奇斯欽訳）1955

ウラヂミルツオフ著：蒙古社会制度史（外務省調査部訳）1941